

科目分類	専門科目 社会	対象学年	2
授業科目	地域課題総理解	学期	前期授業
担当教員	豊田 知世	選択／必修	選択
科目コード	H031290	授業形態	演習
		単位数	1

授業の概要	<p>【授業の目的】</p> <p>島根県が抱える課題について、総合政策学部総合政策学科と看護学部看護学科の学生が一堂に会し演習方式で議論し、報告することを通じ、ひとつの地域課題に対して学際的に考えることの必要性を理解するとともに、その考え方を学習する。</p> <p>【達成目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 他学部の学生との意見交換を通じて、異なる専門分野の見方を理解できる。 2. 理解したことを咀嚼し、自らの言葉で他人に説明できる。 3. 地域の抱える課題について包括的に分析できる。 4. 複眼的な視野を持つことができる。
-------	--

授業の内容	<p>テーマは「島根県における防災・減災を目指した健康課題とその対策」とし、①事前学習、②ディスカッション、③報告会の3段階で実施する。</p> <p>＜事前学習＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマに関して、文献調査等を行い、事前課題として「レポート」と「パワーポイント」原稿を作成、提出する。 <p>【1】事前学習成果の共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前に提出したパワーポイント原稿を用いて、事前学習の成果を発表し、共有する。 <p>＜ディスカッション＞</p> <p>【2】～【3】グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5～6名のグループを示す。 ・事前学習の成果をもとに、学際的に異なる専門分野から物事をとらえてディスカッションを行い、各グループのテーマを決める。 <p>【4】中間発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループのテーマを発表し、意見交換を通して決定する。 <p>【5】～【6】 グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・報告会に向けて、グループとしての報告資料(パワーポイント)を作成する。 <p>＜報告会＞</p> <p>【7】発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループで作成したパワーポイントを用いて報告し、共有する。 <p>【8】まとめ</p>
-------	--

テキスト	特に指定しない。
------	----------

参考文献	別途、通知する。
------	----------

評価方法	<p>学生の相互評価やSAの意見を参考に、総合的に評価する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 事前に示した課題(30%) ② 参加意欲・姿勢(50%) ③ プレゼンテーション(20%)……グループ評価とする
------	---

その他	<p>※この科目は「しまね地域マイスター」の必修科目である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月24日(土)、25日(日)の1泊2日の集中講義として行い、出雲キャンパス3号館学生ラウンジとサンレイクを会場とする。 ・交通費と宿泊費は大学が支出するが、飲食費は個人負担となる(4食)。
-----	--

<p>・事前学習はそれぞれの学生が文献調査を中心に個別に取り組む。</p> <p>・テーマに関する周辺知識を事前に学習しておかなければディスカッションに参加できなくなるので、各自が注意すること。</p> <p>＜事前課題＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポートはWordで作成し、A4サイズ2～3ページにまとめる。 ・パワーポイントはレポートの概略を紹介し、8枚以内にまとめる。 <p>※1</p> <p>※2</p>

科目分類	専門科目 社会	対象学年	
授業科目	地域社会学	学期	前期授業
担当教員	村井 重樹	選択/必修	選択
科目コード	H031030	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要
 本講義は、地域社会に生きるわれわれの社会生活の諸側面を都市社会学と地域社会学の学説、理論・方法、ならびにそれらの研究成果に基づいて考察するものである。前半部では、近代社会における産業化・都市化に関わるマクロな動向を解説し、後半部では、そうした社会変動を背景として現れる地域社会のさまざまな問題を取り上げて考察する。これらの考察を通して、現代の地域社会に対する理解を深めていく。

【到達目標】

- (1) 都市社会学・地域社会学の基礎的な概念や考え方を自分の言葉で説明できる。
- (2) 今日における都市や地域社会の諸問題を発見し、社会学の視点に基づいて分析できる。

授業の内容	第1回 イントロダクション——都市社会学と地域社会学 第2回 都市とは何か——多様な都市概念 第3回 都市とは何か——近代化と都市 第4回 シカゴ学派の都市社会学——都市社会学の始まり 第5回 都市に住むこと——都市的生活様式について 第6回 都市と農村——都市はなぜ飢えないのか 第7回 都市とグローバル化——インナーシティ問題 第8回 都市と郊外——郊外化の問題 第9回 地域社会とコミュニティ——コミュニティとは？ 第10回 地域社会とネットワーク——つながりの再編 第11回 コミュニティと外国人——地域社会の多様化 第12回 地域社会と家族——家族意識の変化 第13回 地域社会と観光——観光のまなざし 第14回 地域社会と人々の意識——地元志向の現在 第15回 総括——都市と地域を社会的に思考する
--------------	---

テキスト
 ・特定のテキストは使用しない。
 ・プリントを配布して講義する。

参考文献
 ・藤田弘夫・吉原直樹〔編〕、1999年、『都市社会学』有斐閣
 ・森岡清志〔編〕、2008年、『地域の社会学』有斐閣
 ・地域社会学会〔編〕、2011年、『キーワード 地域社会学』ハーベスト社
 ・松本康〔編〕、2014年、『都市社会学・入門』有斐閣

評価方法
 ・授業内で取り上げた都市社会学・地域社会学の学説や考え方についての理解度を問う論述形式の試験に基づき評価する(85%)。
 ・適宜リアクション・ペーパーによって授業に対するコメントや疑問・質問の提出を求め、それに基づき評価する(15%)。

その他
 疑問・質問があるときは、気軽に相談してください。
 ※1
 ※2

科目分類	専門科目	対象学年	2・3・4
授業科目	NPO・NGO論	学期	前期集中
担当教員	非常勤講師 足立治郎	選択/必修	選択
科目コード	H031230	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要
 NPO・NGOは、市民が主体的に集まり立ち上げた非営利・非政府の組織である。今日、私達の社会では環境・災害・貧困・人権・ジェンダー・過疎など、様々な課題が顕在化している。NPO・NGOは、政府・国際機関や企業等の既存組織のみでは解決に至らない状況で、こうした課題の解決を目指し、世界・国内で発展してきた。

NPO・NGOは、政府や企業等の既存組織と連携し、その取組を補完する機能を果たすとともに、既存組織の取組・行動の改革、制度・政策の変革をも促す役割を担ってきている。社会課題解決・公益達成には、NPO・NGOへの理解を深めることが重要である。

本授業では、NPO・NGOの基本概念・全体像を俯瞰した後、NPO・NGOと既存組織・他のセクターとの関係性、社会課題解決におけるNPO・NGOの役割を、活動例(海外・日本の地域での取組事例も含む)も紹介しつつ把握していく。最後に、NPO・NGOの今後の可能性と課題、NPO・NGOの参加・支援の可能性・あり方を検討する。なお、「NPO・NGOを取り巻く制度」「社会起業家」「震災復興」「地方創生」等の最新の動向も取り入れた授業とする。

【到達目標】

- 「①NPO・NGOを理解するための基礎的知識」「②社会課題解決を考えるための応用的知識」「③社会参加のスキル・方法に関する知識」を得、自分の言葉で説明できる。

授業の内容	【NPO・NGOの全体像】(1日目) 第 1 回「NPO・NGOの全体像① 導入—社会課題とNPO・NGO」 第 2 回「NPO・NGOの全体像② NPO・NGOとは何か—その役割・特徴・分類」 第 3 回「NPO・NGOの全体像③ 海外におけるNPO・NGOの発展・変容」 第 4 回「NPO・NGOの全体像④ 日本におけるNPO・NGOの発展・変容」 【NPO・NGOと他のセクター】(2日目) 第 5 回「NPO・NGOと他のセクター① NPO・NGOと企業」 第 6 回「NPO・NGOと他のセクター② NPO・NGOと行政・政治」 第 7 回「NPO・NGOと他のセクター③ NPO・NGOと国際機関」 第 8 回「NPO・NGOと他のセクター④ NPO・NGOと市民・メディア」 【NPO・NGOとミッション】(3日目) 第 9 回「NPO・NGOとミッション① 貧困・人権とNPO・NGO」 第10回「NPO・NGOとミッション② 震災/災害とNPO・NGO」 第11回「NPO・NGOとミッション③ 環境保全とNPO・NGO」 第12回「NPO・NGOとミッション④ 地域活性化/地方創生とNPO・NGO」 【NPO・NGOの今後】(4日目) 第13回「NPO・NGOの今後① 今後の可能性」 第14回「NPO・NGOの今後② 今後の課題」 第15回「NPO・NGOの今後③ NPO・NGOへの参加(就職も含む)の可能性」 授業の中で、グループ作業によるNPO・NGO実践例の調査・発表の機会も設ける。なお、参加する学生の興味・関心により、授業内容を若干変更する可能性がある。
--------------	---

テキスト
 逐次、配布

参考文献
 P・F・ドラッカー著「非営利組織の経営—原理と実践—」(ダイヤモンド社)

評価方法
 最終レポート70%、授業中に記述するミニレポート30%、授業での発言・発表で加点

その他
 担当教員(NPO・NGO事務局長)の政策担当者・企業等との連携・働きかけの経験も紹介
 ※1

科目分類	専門科目 社会	対象学年	2・3
授業科目	生活時間構造論	学期	後期授業
担当教員	藤原 真砂	選択／必修	選択
科目コード	H031060	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要

生活時間構造論は全国で、本学で唯一開講されている講義である。最近の少子高齢化問題にも大きな貢献が期待される学問分野である。家庭、地域、職場における男女のワークライフバランスの推進は出産、子育て、介護などの問題の解決に鍵を担っているからである。受講生はこれらの時間的実態を明快に理解できる。

生活時間構造論は生活時間調査データを活用して構築されている。活用される生活時間調査(Survey on Time Use)データは、被調査者に1日24時間をどのように消費したかを日記帳形式の調査票に記録することを依頼し、この記録をもとに集団(性、年齢、職業、地域などさまざまな属性集団)の時間の消費状況等を集計したものである。家計調査(household budgets)がお金の使われ方を消費項目別に集計するのに対して、生活時間調査は1日の時間の使われ方を行動項目別に集計する。タイムバジェット調査とも言われる理由はそこにある。国民所得や家計支出など金額で表示される経済指標と同様、時間の使われ方という非経済指標を用いて生活の諸側面の質を把握する狙いがある。生活時間データは政策科学の展開に不可欠な社会の診断データである。

本講座ではNHK国民生活時間調査、総務省社会生活基本調査のデータを用い過剰労働、過労死、子育て、介

授業の内容

1. 生活時間のはなし。(講義内容をもう一度整理しておきます)
2. 生活時間と労働時間。
3. 生活時間調査とは。
4. 労働時間の昔と今。
5. 生活時間を通して見る人々の生活リズム。
6. 残業の時に生活時間はどのように変化するか。
7. ホワイトカラーのワークライフバランス。
8. 子育て世帯の時間構造。
9. 老老介護世帯の時間構造。
10. 金があるときは暇がなし？
11. 男女共同参画社会の構築を目指して。
12. 少子高齢化とワークライフバランス。
13. 少子高齢化と日本社会の生活時間構造の変化。
14. 生活時間研究と政策科学。
15. 総括

第1回 生活時間調査とは何か
第2回 少子高齢化に対する我が国の取り組み
第3回 少子高齢化とワークライフバランス、男女共同参画社会の構築
第4回 ワークライフバランス研究の分析課題
第5回 生活時間統計について学ぶ(1)
第6回 生活時間統計について学ぶ(2)
第7回 長時間労働問題とワークライフバランス(1)
第8回 長時間労働問題とワークライフバランス(2)
第9回 全行動時刻別行為者率分析とは何か
第10回 結婚への参加とワークライフバランス
第11回 家事・育児参加とワークライフバランス
第12回 老々介護参加とワークライフバランス
第13回 自己研鑽・研修参加とワークライフバランス
労働組合参加とワークライフバランス
第14回 子育て環境、ワークライフバランス先進県としての島根県

	第15回 ワークライフバランス社会の構築ー量的拡大から質的向上へー
テキスト	藤原真砂(2016)「ワークライフバランスの社会学的研究と生活時間研究」島根県立大学総合政策学会『総合政策論叢』第31号、83-102頁。
参考文献	矢野真和編1995年『生活時間の社会学』東京大学出版会。
評価方法	出席3割、テスト7割。 出席重視。
その他	知的好奇心ある方を望む。 ※1 ※2

科目分類	専門科目	対象学年	2・3・4
授業科目	社会保障論	学期	前期集中
担当教員	非常勤講師 金子 勇	選択／必修	選択
科目コード	H031110	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要 本講義では、社会保障論の制度面の概観とともに、現代日本の社会保障や社会福祉の現状を左右する少子化や高齢化にも配慮する。とりわけ日本社会を構造変化させる少子化と高齢化について考える。到達目標：少子化の原因、これまでの対策の歴史、制度面での対応、国民の少子化に関する意識などを総合的に考慮して、学生が新しい少子化対策制度について説明できるようにする。あわせて、少子化の中で増大してきた児童虐待問題の原因と現状それに予防的な対策についても学生が資料を通して思索して、説明できる。高齢化に関しても、単身高齢者の増加による孤独死、生きがい問題、コミュニケーション阻害、高齢者福祉財源問題などに関して詳しく抗議する。到達目標：学生が、高齢化に関しても論理的に思考できるような資料をそろえ、社会学を通してみた社会保障・福祉問題の解決に向けて説明できる。

授業の内容 第1回 講義の流れの概説 社会保障と社会学の考え方
 第2回 社会保障に影響する日本の人口動態
 第3回 少子化の原因と現状
 第4回 社会的リスク論と少子化
 第5回 少子化対策の歴史と評価
 第6回 少子化克服への制度の提唱
 第7回 児童虐待の現状と課題
 第8回 児童虐待の大都市比較分析
 第9回 高齢化の現状と課題
 第10回 高齢化と健康問題
 第11回 高齢化と生きがい問題
 第12回 高齢者の社会参加
 第13回 高齢者と地域福祉
 第14回 「少子化する高齢社会」における社会保障
 第15回 講義のまとめと質疑応答

テキスト 金子勇 『日本の子育て共同参画社会』ミネルヴァ書房、2016年

参考文献 金子勇『日本のアクティブエイジング』北海道大学出版会、2014年
 金子勇『「成熟社会」を解説する』ミネルヴァ書房、2014年
 金子勇『少子化する高齢社会』日本放送出版協会、2006年

評価方法 定期試験としてレポートの内容で評価する。

その他 ※1
 ※2

科目分類	専門	対象学年	
授業科目	家族社会学	学期	前期授業
担当教員	齋藤 暁子	選択／必修	選択
科目コード	H031270	授業形態	講義
		単位数	

授業の概要 この講義では、身近であるからこそ客観的に捉えることが難しい「家族」を、社会学の視点から検討していきます。まず、現代社会における家族を把握するために家族社会学の基礎的な理論を学びます。次に結婚や夫婦関係や親子関係という現代家族の実相を明らかにしていきます。最後に、家族とケアについて勉強していきます。基本的には講義形式で行いますが、身近なテーマでもあるので、グループディスカッションを取り入れながら、理解を深めていきます。この講義を通じて、家族社会学の基礎的な知識を得るだけでなく、これまでの「家族」の経験や将来の「家族」について、広い視野から考える契機にしたいと思います。【到達目標】社会学の視点から、現代の家族を考えるにあたって基本的な知識を習得すること。自らの持つ家族観を相対化し、今後の家族のありようについて考える能力を身につけること。

授業の内容 1. 「家族」とはなにか？——家族へのアプローチ—— 2. 近代家族の成立と変容① 3. 近代家族の成立と変容② 4. ジェンダー論と家族関係 5. 個人化する家族 6. 現代の結婚——未婚化・晩婚化の社会的背景—— 7. 現代の夫婦関係 8. 離婚・再婚と親子関係 9. 育児①——少子化と家族政策—— 10. 育児②——子育て規範と親子関係—— 11. 障害を持つ人と家族 12. 高齢者介護——夫婦間介護と親子間介護—— 13. 終末期ケアと家族 14. 家族への支援——ケアの社会化と家族—— 15. まとめ・家族のゆくえ

テキスト 教科書は使用しません。毎回、資料とレジュメを配布します。

参考文献 講義内で適宜紹介します。

評価方法 定期試験(70%)、グループワーク(30%)を総合して判断します。

その他

科目分類	専門科目 社会	対象学年	2・3・4
授業科目	国際社会学	学期	前期授業
担当教員	非常勤講師 山口 いずみ	選択／必修	選択
科目コード	H031130	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>本講義では国境を超える社会現象や国民社会の多文化化について国際社会学という視点から考察したい。そのために国際社会学の基礎概念と理論について学んだ後、多文化社会の現実を検討していく。</p> <p>まず国民の多様化を語る際に用いられるエスニシティと「人種」という概念について論じる。これらの概念がいかに社会的に構築されているのかを明らかにする。ところで国境とは国民国家の境界線に他ならない。国際社会という概念や国際社会学という学問領域は国民国家という枠組みを前提に成立していると言えるだろう。そこで国民国家の成立過程やその展開、とりわけグローバル化のもとでのその変容について検討する。また国際人口移動の諸形態を概観するとともに、なぜ人は国境を超えて移動するのかという問題を、国際人口移動に関する理論を参照しつつ考えたい。さらに「国際移民の女性化」や国境を跨ぐ諸制度についても言及する。</p> <p>以上の国際社会学の基本的知識を踏まえて、多文化社会の現実アプローチする。国境を超える社会現象に対して国家はどのように対応しうるのであるのか、カナダと日本を事例に検討する。多民族社会であり、移民政策を国家建設の一環として位置付け、多文化主義政策を世界に先駆けて採用したカナダと、民族的同質性が比較的高く、外国人労働者の受け入れ政策を展開し、多文化共生を謳う日本の比較は、国際社会の行方を考える上で示唆に富んだものだろう。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際社会が直面している諸問題を国際社会学の基礎的概念や理論を用いながら自己の言葉で説明できる。 ・エスニシティと「人種」という概念の成り立ちを説明できる。 ・国際人口移動の様々な形態について具体的な事例と理論的な分析を関連づけて理解できる。 ・多文化社会の現実に対応した国家・政府の政策を多文化主義や多文化共生という観点から評価することができる。
-------	---

授業の内容	<p>イントロダクション</p> <p>第1回 ガイダンス 講義の概要と評価方法を説明する。 国際社会学とはなにかを概説する。</p> <p>第1部 国際社会学の基礎概念と理論</p> <p>第2回 エスニシティと「人種」① 人種概念やエスニシティ概念がどのような現象を示すのか、どのような歴史的な脈で形成されたのかを論じる。</p> <p>第3回 エスニシティと「人種」② エスニシティをめぐる主要な考え方(原初主義、境界主義、表出主義…)について説明する。</p> <p>第4回 国民国家の成立とその展開① ナショナリズムやネーションに関して基本的な概念規定を行う。</p> <p>第5回 国民国家の成立とその展開② ナショナリズムの多様な性格やナショナリズムの起源をめぐる主要な考え方(近代主義と歴史主義)について考察する。</p> <p>第6回 なぜ人は移動するのか① 国際人口移動の形態(入植移民、労働移民、難民…)について説明する。</p> <p>第7回 なぜ人は移動するのか② 国際人口移動に関する理論(プッシュ・プル理論、歴史構造論、移民システム論)を検討する。</p> <p>第8回 国際移民とジェンダー 国際移民がジェンダーによっていかに異なって経験されるのかを論じる。</p> <p>第9回 国境を超える制度</p>
-------	---

	<p>超国家的諸制度(地域統合、グローバル都市、エスニック・メディア…)の可能性や限界について説明する。</p> <p>第II部 多文化社会の現実</p> <p>第10回 多文化社会と社会統合 「受け入れ社会」はどのような理念(同化、多文化主義、社会的結合…)のもと、移民やエスニック・マイノリティの統合を図っているのかを考察する。</p> <p>第11回 カナダ① カナダの移民政策の変遷について論じる。</p> <p>第12回 カナダ② カナダ多文化主義の理念と政策を検討する。</p> <p>第13回 日本① 日本の外国人受け入れ政策の展開を説明する。</p> <p>第14回 日本② 日本の多文化共生とはなにかを考察する。</p> <p>第III部 まとめ</p> <p>第15回 まとめと試験</p> <p>* 以上の授業計画は履修者数や授業の進度によって変更になる場合があります。</p>
--	--

テキスト	<p>特定のテキストは使用しません。プリント(講義レジュメと資料)を配布します。 映像資料を鑑賞する時間を設ける予定です。</p>
参考文献	<p>有田伸・山本かほり・西原和久編『国際移動と移民政策―日韓の事例と多文化主義再考』東信堂、2016年。</p> <p>梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版会、2005年。</p> <p>樽本英樹『よくわかる国際社会学』(第2版)、ミネルヴァ書房、2016年。</p> <p>西原和久・樽本英樹編『現代人の国際社会学・入門―トランスナショナルリズムという視点』有斐閣、2016年。</p> <p>宮島喬・佐藤成基・小々谷千穂編『国際社会学』有斐閣、2015年。</p>
評価方法	<p>平常点評価50%: 毎回の講義時間内にリアクション・ペーパーを提出してもらいます。 期末試験50%</p>
その他	<p>参考文献を事前に読むことを求める場合があります。 非常勤講師ですので、オフィスアワーは講義前・後(金曜日)です。必ずアポイントメントをとってください。 ※1 ※2</p>

科目分類	専門科目 社会	対象学年	2・3・4
授業科目	中国社会学論	学期	前期授業
担当教員	江口 伸吾	選択／必修	選択
科目コード	H031140	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>1978年以降の改革・開放期の中国は、とくに1993年の社会主義市場経済体制の確立以降、グローバル化といった新たな国際的インパクトを積極的に受け入れながら、その社会のあり方もよりラディカルに変化させた。それは、市場経済化による社会変動が、社会の多元化を生み出すと同時に、それに対処しようとする権威主義的な政治制度の改革が活発に論議されたことなどに示される。</p> <p>さらに、このような変化は、中国の国内問題にとどまらない。改革・開放期の市場経済化とそれに対応した制度改革は、国際的なグローバル化の動向と連動性を高めることにより、中国をとりまく国際社会の諸変化と共に進展していると考えられる。とくに2010年に中国はGDP世界第二位の経済大国となったことに象徴されるように、「新常态」と言われる中成長時代を迎える現在にあっても、その国際社会における影響力を持続的に増大させている。</p> <p>本講義では、以上のような問題関心にもとづき、歴史的な展開過程を踏まえながら、現代中国の社会の変化とその特質を考察することを目的とする。さらには、中国の事例を通じて、近代的な国民国家形成という同様の課題を担う他のアジア諸国と比較考察するための一つの視座を培ってきたい。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代中国の政治社会の基本的な問題について論理的に思考・分析できる。
-------	---

授業の内容	<p>第1回 イントロダクションー地域研究と社会科学</p> <p>第2回 伝統的中華世界と西欧の衝撃</p> <p>第3回 近代化の路線ー洋務・変法・革命をめぐる(1)</p> <p>第4回 近代化の路線ー洋務・変法・革命をめぐる(2)</p> <p>第5回 中華人民共和国の建国と社会主義建設</p> <p>第6回 改革・開放期の政治・社会改革ー鄧小平の近代化路線</p> <p>第7回 農村の社会変動</p> <p>第8回 都市空間の変容</p> <p>第9回 中国における民主化ー制度改革と農村</p> <p>第10回 中国における中央ー地方関係</p> <p>第11回 地域間格差と開発戦略ー「西部大開発」、「東北振興」をめぐる</p> <p>第12回 周辺からの問いかけー多民族国家の諸相</p> <p>第13回 一国二制度の可能性と課題ー香港・台湾をめぐる</p> <p>第14回 多国間協力の展開と地域共同体のゆくえ</p> <p>第15回 まとめー10年後の中国はどうなるのか？</p>
-------	--

テキスト	とくに指定しない。
------	-----------

参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・宇野重昭・江口伸吾・李曉東編『中国式発展の独自性と普遍性ー「中国模式」の提起をめぐるー』(国際書院、2016年) ・中國和仁編『中国からつくる国際関係』(ミネルヴァ書房、2013年) <p>その他の参考文献は、授業で随時指定します。</p>
------	--

評価方法	成績評価は、出席・レポート(40%)、期末試験(60%)の実施を通して、総合的に評価を行います。
------	--

その他	<p>※1</p> <p>※2</p>
-----	---------------------

科目分類	専門科目	対象学年	2・3・4
授業科目	朝鮮半島社会学論	学期	後期授業
担当教員	福原裕二	選択／必修	選択必修
科目コード	H031150	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>本講義は、「地域研究」としての朝鮮半島研究入門を意識して内容が構成されている。地域研究は、理論研究とともに両輪をなす研究体系であり、その役割は、内政、国際関係、経済、社会、歴史、文化一般等々の多くの分野で、できるだけ包括的に関連させる研究を行い、ある地域を地域全体として把握することにある(岡部達味)。そこで、本講義では、「学としての地域研究」を習得する「はじめの一步」として、朝鮮半島地域(あるいは韓国及び北朝鮮地域)を地域全体として理解するための初歩的な知識の習得を目指す。全講義中の1~2回程度は、韓国人講師を招聘し、講演会を実施する予定である。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ◎朝鮮半島社会の比較的良好に知られた特質について、偏見なく自らの言葉で解説することができる。 ◎朝鮮半島社会の関心ある分野を取り上げ、レポートを作成することができる。
-------	--

授業の内容	<p>授業内容は、「授業の概要」「授業計画」欄に記載した通り。</p> <p>以下は「参考文献」欄の続きです。</p> <p><韓国人論></p> <ul style="list-style-type: none"> ・権鎔大『あなたは本当に「韓国」を知ってる』駿河台出版社、2015年 ・小倉紀蔵『心で知る、韓国』岩波現代文庫、2012年 ・裴元基『あなたのとなりの韓国人とうまくつきあう法』講談社+α文庫、2010年 ・金栄勲、金順姫訳『韓国人の作法』集英社新書、2010年 <p><社会・文化></p> <ul style="list-style-type: none"> ・朴美暎『韓国の「鬼」:ドッキリの視覚表象』京都大学学術出版会、2015年 ・裴海善『韓国の少子化と女性雇用』明石書店、2015年 ・伊藤亜人ほか監修『[新版]韓国朝鮮を知る事典』平凡社、2014年 ・石坂浩一ほか編著『現代韓国を知るための60章(第2版)』明石書店、2014年 ・金成玟『戦後韓国と日本文化ー「倭色」禁止から「韓流」まで』岩波書店、2014年 ・徐勝ほか編『言葉のなかの日韓関係ー教育、翻訳通訳・生活』明石書店、2013年 ・岩淵秀樹『韓国のグローバル人材育成力:超競争社会の真実』講談社現代新書、2013年 ・館野哲『韓国の暮らしと文化を知るための70章』明石書店、2012年 ・浅見雅一、安廷苑『韓国とキリスト教』中公新書、2012年 ・小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』有斐閣選書、2012年 ・高翔龍『韓国社会と法』信山社、2012年 ・水野邦彦『抵抗の韓国社会思想』青木書店、2010年 ・鄭大聲『朝鮮半島の食と酒』中公新書、1998年 ・加地伸行『儒教とは何か』中公新書、1990年 <p><政治・経済></p> <ul style="list-style-type: none"> ・朴永圭著、金重明訳『韓国大統領実録』キネマ旬報社、2015年 ・大西裕『先進国・韓国の憂鬱ー少子高齢化、経済格差、グローバル化』中公新書、2014年 ・李允福ほか著『入門テキスト現代韓国経済』つげ書房新社、2014年 ・百本和弘ほか編著『韓国経済の基礎知識』ジエトロ、2012年 ・木村幹『朝鮮半島をどう見るか』集英社新書、2004年 ・木宮正史『韓国:民主化と経済発展のダイナミズム』ちくま新書、2003年 ・内山清行『韓国葛藤の先進国』日経プレミアシリーズ、2013年 <p><軍事></p> <ul style="list-style-type: none"> ・チュチュンヨン『韓国徴兵、オレの912日』講談社+α文庫、2006年 ・康熙奉『韓国の徴兵制:兵役経験者が吐露した真実』双葉新書、2011年 <p><北朝鮮・南北関係></p>
-------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・鄭銀淑編『北朝鮮の楽しい歩き方』双葉新書、2015年 ・徐大肅、林茂訳『金日成』講談社学術文庫、2013年 ・平岩俊司『北朝鮮：変貌を続ける独裁国家』中公新書、2013年 ・伊豆見元『北朝鮮で何が起きているのかー金正恩体制の実相』ちくま新書、2013年 ・牧野愛博『北朝鮮秘録ー軍・経済・世襲権力の内幕』文春新書、2013年 ・山口真典『北朝鮮経済のカラクリ』日経プレミアシリーズ、2013年 ・平井久志『北朝鮮の指導体制と後継ー金正日から金正恩へ』岩波現代文庫、2011年 ・菊池正人『板門店：統一への対話と対決』中公新書、1987年
	<p>第1回 イントロダクション(地域研究とは何か)</p> <p>第2回 朝鮮半島の常識？！</p> <p>第3回 朝鮮半島社会の社会関係1: 伝統社会① 朝鮮半島における人間関係の特質ー血縁・地縁・学縁</p> <p>第4回 朝鮮半島社会の社会関係1: 伝統社会② 朝鮮半島における人間関係の特質ー血縁・地縁・学縁</p> <p>第5回 朝鮮半島社会の社会関係2: 家族と女性① 変化する朝鮮半島の社会関係ー父系血縁関係・家族</p> <p>第6回 朝鮮半島社会の社会関係2: 家族と女性② 変化する朝鮮半島の社会関係ー女性をめぐる問題</p> <p>第7回 朝鮮半島の宗教文化1: 朝鮮と日本・宗教史の特質・儒教と巫俗</p> <p>第8回 朝鮮半島の宗教文化2: 現代韓国・北朝鮮の宗教状況</p> <p>第9回 朝鮮半島の社会と政治1: 韓国政治の権力観と地域主義</p> <p>第10回 朝鮮半島の社会と政治2: 北朝鮮の首領制</p> <p>第11回 朝鮮半島の社会と軍事1: 韓国・北朝鮮の重層的な軍事態勢</p> <p>第12回 朝鮮半島の社会と軍事2: 韓国・北朝鮮の社会と軍事(徴兵制)</p> <p>第13回 朝鮮半島の社会と経済: 韓国・北朝鮮経済の推移とその光と影</p> <p>第14回 韓国人講師の講演会(日程は前後します)</p> <p>第15回 期末筆記試験</p>
テキスト	<p>テキストは用いない。</p> <p>講義では、毎回レジュメ(パワポ)を準備し、講義の手引き、板書の代替とする。このレジュメは、MOODLEの所定の場所より閲覧・ダウンロードできる(詳しくは、初回の講義で説明する)。</p>
参考文献	<p>ここでは、講義の内容にそくし、比較的入手が簡便・安価で読みやすい文庫・新書(一部単行本)などを紹介する。そのほか専門書については、必要があればレファレンスします。</p> <p><歴史></p> <ul style="list-style-type: none"> ・李成茂、李熙真著、平木實、中村葉子訳『韓国史：政治文化の視点から』日本評論社、2015年 ・趙世煥著、姜喜代訳『日韓外交史：対立と協力の50年』平凡社新書、2015年 ・趙景達『近代朝鮮と日本』岩波新書、2012年 ・外村大『朝鮮人強制連行』岩波書店、2012年 ・礪波護、武田幸男『隋唐帝国と古代朝鮮』(世界の歴史⑥) 中公文庫、2008年 ・水野直樹『創氏改名：日本の朝鮮支配の中で』岩波新書、2008年 ・大沼保昭『「慰安婦」問題とは何だったのかーメディア・NGO・政府の功罪』中公新書、2007年 ・金尙基『韓国の歴史を知るための66章』明石書店、2007年 ・文京洙『韓国現代史』岩波新書、2005年 ・池明観『韓国民主化への道』岩波新書、1995年 ・宮嶋博史『両班(ヤンバン)：李朝社会の特権階層』中公新書、1995年 ・村井章介『中世倭人伝』岩波新書、1993年
評価方法	出席状況・聴講姿勢と中間レポート(50%)・期末筆記試験(50%)の成績を勘案して評価する。
その他	<p>講義には、パソコンの持参を奨励する。</p> <p>※1</p>

科目分類	専門科目	対象学年	2・3・4
授業科目	ロシア社会論	学期	前期授業
担当教員	山本 健三	選択/必修	選択必修
科目コード	H031160	授業形態	講義
		単位数	2
授業の概要	<p>今日、ロシアの国際政治における存在感は、誰にとっても無視しえないものになりつつあり、ロシアについて理解を深めることは重要である。本講義では、現代ロシア社会の現状を理解するために必要な知識と視座を得ることを目的とする。主に、自然と地理・歴史・文化と社会・法律・中央と地方・イデオロギーという6つの観点から、ロシア社会の特質・変化・連続性を探る。</p> <p>【到達目標】 ロシア社会の特徴を論理的に説明できるようになる。 ロシアに関する言説を批判的に解釈できるようになる。</p>		
授業の内容	<p>第1回 ロシアの「大きさ」と「位置」</p> <p>第2回 ロシアの歴史①: 帝政の成立～クリミア戦争</p> <p>第3回 ロシアの歴史②: 農奴解放～ロシア革命</p> <p>第4回 ロシアの歴史③: ソ連成立～ベレストロイカ</p> <p>第5回 ロシアの歴史④: ソ連崩壊～現代</p> <p>第6回 日露関係の歴史</p> <p>第7回 ロシアの文化と社会①: ロシア語とロシア文学</p> <p>第8回 ロシアの文化と社会②: 知識人(インテリゲンツィア)の役割</p> <p>第9回 ロシアの文化と社会③: 宗教の役割</p> <p>第10回 ロシアの文化と社会④: 学問・芸術・スポーツ</p> <p>第11回 現代ロシア法体系と法二重リズム</p> <p>第12回 ロシアの「中央」と「地方」の関係</p> <p>第13回 ロシアとロシア共和国以外の連邦構成主体との関係</p> <p>第14回 現代ロシアのイデオロギー状況: ユーラシア主義をめぐって</p> <p>第15回 まとめ: 今後の展望</p>		
テキスト	配布レジュメ		
参考文献	<p>田中陽児・倉持俊一・和田春樹編『ロシア史』全三巻、山川出版社、1994～1997年。</p> <p>松戸清裕『ソ連史』ちくま新書、2011年。</p> <p>『現代思想：【特集】ロシア』2014年7月号。</p> <p>渋谷謙次郎『法を通してみたロシア国家ーロシアは法治国家なのか』ウェッジ、2015年。</p> <p>塩川伸明・池田嘉郎編『社会人のための現代ロシア講座』東京大学出版会、2016年。</p> <p>土肥恒之『ロシア・ロマノフ王朝の大地』講談社学術文庫、2016年。</p> <p>山本健三『帝国・く陰謀』・ナショナリズムー「国民」統合過程のロシア社会とバルト・ドイツ人』法政大学出版局、2016年。</p> <p>池田嘉郎『ロシア革命ー破局の8カ月』岩波新書、2017年。</p> <p>下斗米伸夫『ソヴィエト連邦史1917～1991』講談社学術文庫、2017年。</p> <p>上記以外の文献は、講義で必要に応じて適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>平常点30% 中間レポート30% 期末試験40%</p> <p>平常点は、主に出席状況によって判断する(原則として、出席日数の3分の2以上出席しなければならない。遅刻2回で1回の欠席と見なす)。</p> <p>中間レポートでは、指定した文献の「書評」を提出していただく。</p>		
その他	<p>受講者は、日頃からロシアに関するニュース記事や書物に目を通しておくことが望ましい。</p> <p>※1</p>		